

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2694100161		
法人名	ヒューマンライフケア株式会社		
事業所名	ヒューマンライフケア山科グループホーム2F		
所在地	京都市山科区西野山中鳥井町28		
自己評価作成日	令和4年6月12日	評価結果市町村受理日	令和4年9月9日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/26/index.php?action_kouhou_detail_022_kani=true&amp;JlgvoCd=2694100161-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search">https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/26/index.php?action_kouhou_detail_022_kani=true&amp;JlgvoCd=2694100161-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人 京都ボランティア協会		
所在地	〒600-8127京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町83-1「ひと・まち交流館」1階		
訪問調査日	令和4年7月11日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

コロナ禍により長引く面会制限や外出制限もあり、これまでできていた花見や秋祭り、クリスマス会等が中止となり、施設内で利用者様のみで行えるイベントに移行しています。その中でも認知機能を保つための取り組みを中心に考え、食事レクや、体操、移動コンビニなどを利用し、制限された生活の中で楽しみを見つけていけるようにしています。またこれらのイベント時も感染対策を怠ることなく徹底しながらも、お互いのコミュニケーションを大事にし、利用者様同士が交流を図れるような工夫を行っています。利用者様や職員の体調をこまめに把握し、可能な限りユニット間の交流も途切れさせないように行き来しています。家族様との面会も、オンラインから徐々に対面に移行し、1階にある地域交流室を利用し、短時間の面会から再開しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

会社理念を「『笑顔』『どころ』いつでも人が真ん中』と明文化し、グループホームの理念を「いつも笑顔の絶えない明るい施設を目指します」として、今まで自宅で過ごされていた時の入居者の姿を引き出し本音が出せることを馴染んで来られて良かったと捉えられています。困難事例と捉えがちな事も利用者が自然体でいられることを大切にされ、入居者が、それぞれに室内や廊下などいろいろな所を歩きたい方、リビングに自分のソファを持ち込んでずっと座られてソファの周りは自分で掃除される方、野菜作りや畑仕事が好きで以前はカマで草刈りをされていたが、(年齢とともに危険を感じて)今は手で草むしりをされる方、胡瓜や茄子などの夏野菜で漬物(ぬか漬)を漬けるのが好きな方など、入居者が自分のやりたい事を続けられる支援をされています。また、排泄用品が蒸れたり、ゴムの跡がつくことから、通気性の良い「尿取りパット対応の布パンツ」を半年ぐらい前から3人の方に使い始め、少しでも快適に過ごせるように経過を見られていて、家族からは蒸れを防いで費用も今までより安くなると喜ばれています。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

## 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は各フロアに大きく提示されており、一目でわかようるにすることで、全職員が意識できるようにしている	理念を『笑顔』と「こころ」いつでも人が真ん中』とし、コンセプトを「ご入居者とスタッフが家族のような温かい施設をめざします」と掲げ、パンフレットに掲載している。各リビングには法人の理念とグループホームの理念を大きく掲示し、利用者に親しまれ、職員に意識づけられるようにしている。職員は年度末のグループホーム会議で理念について話し合っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	新型コロナウイルスの影響で地域行事への参加を見送っている	町内会に入り、地域の一員として組長も担い、集会や地域の行事にも参加をしてきたが、ここ2年間は地域の行事も全部中止になっている。地主さんから、畑で採れた夏野菜をもらい、利用者がぬか漬けにしてみんなで食べたり、毎年、地域の方に貰った笹で七夕飾りを作るのを楽しみにしている。コロナ禍までは、もらった竹で流しソーメンを楽しんでいた。また、事業所の駐車場に月1回移動コンビニに来てもらい、利用者は買い物を楽しみにし、地域の方も来られるので、交流の場になっている。新型コロナウイルス感染者の増加傾向の時はカタログを見て注文をするなど、密にならないように気を付けている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議や、認知症サポーター研修も非対面や中止がおおく、なかなか活かしていない		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	緊急事態宣言や、まんえん防止等重点措置時は電話にて実施していたが、それ以外の期間は通常通り対面で開催している。限られた中で様々なアドバイスをいただいている	運営推進会議のメンバーは百々学区民生児童委員協議会会長、自治会、民生委員、高齢サポート・勤修職員、家族で構成し、併設の小規模多機能型住宅介護事業所と合同で行っている。コロナウイルスの警報等の発令中は資料を送付して、電話で意見を聞く、書面開催でおこなっている。活動状況を報告して、意見をもらい議事録を作成している。家族全員をメンバーとして資料送付時に出欠を聞いている。メンバーからの意見はコロナ感染予防の徹底についてや、感謝の言葉が出されていたが、意見は少なかった。	書面開催時はメンバーから、電話で意見を聞いているが、資料を送付された時に意見記入用紙も同封し書面で意見を求めてみては如何でしょうか。そして、メンバーから聞いた意見を記載されていますが、意見に対するコメントや所感などを記載されたら、事業所の姿勢が明確になるのではないのでしょうか。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	やましな認知症サポーター会議などがほとんど開催されていない状況となっている	行政の担当課には運営推進会議の議事録を持って行っている。山科区居宅介護支援事業所連絡会は2か月に1回開催(ズーム開催の時もある)され、ヒューマンライフケア山科から一人が出席をして併設事業所と共有している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束廃止委員会は3か月ごとに開催している。委員会議事録は全職員の閲覧を義務付けており、内容を周知している	身体拘束廃止委員会の担当は施設長と副施設長で、3ヶ月毎にブロック長会議で決まった課題をもとに全職員で協議をしている。また、「人権・虐待防止研修」は年2回全員に資料を配布して、ズームで、URLの動画と研修の前におこなった「虐待・拘束チェックシート」を研修内容に取り上げ、討議し、「業務の中で、どうすればいいのか」を書いてブロック長に送る仕組みとしている。エレベーターと非常口は施錠されているが、玄関やユニットの入り口は施錠せずに見守ることを意識して、支援をしている。職員には常に、「利用者の自主性を奪わないで！自分がされたら嫌な事はしない」として、気づけるようにし、職員同士でも声を掛け合うようにしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年に2回高齢者虐待防止の研修時実地しており、基本全員参加を必須としている		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護に関する定められた研修は実地していない。新規採用者にのみ本部を通じてZOOM研修を実地している		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約は施設長、副施設長、ブロック長のいずれかが行う。契約書を丁寧にご契約者様が納得されるまで説明をして、ご理解、同意をいただいてから締結している		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関前に意見箱を設置。意見が入っていれば運営推進委員会を通じて公表、意見をいただき反映させている	家族からの意見は面会時や運営推進会議の時に聞くと共に、年1回本部の満足度アンケートでも意見を聞いている。利用者からは「物忘れをするので、どうしたら良いか」との相談(日記を書いてもらうようにした)や「ビールが飲みたい」「たばこが吸いたい」など。ビールとたばこは、禁止はしていないので、できる場の提供などを行っている。家族からの「歩かして下さい」や「弁当と一緒に食べてもいいか？」などの意見には(弁当はコロナ禍で断った)、職員で検討して出来るだけ反映するようにしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	年に2回職員面談が実地されている。その時に意見や提案を聞く機会を設けているが、個別にも都度面談には応じている	職員からの意見は毎月のユニット会議や朝・夕の申し送りで出された意見は会議録や連絡ノートに記載して共有している。(会議を欠席した人は会議録や連絡ノートをパソコン上で見られるようにしている。)また、年2回の面談で意見や提案を聞いている。職員からの意見はブロック長に挙げ、本部に挙げなければできないことも多いが、利用者の「褥瘡ができればいいので、エアマットを入れてほしい」などの声には直ぐ反映している。このことから、入居者を大切にしている、事業所の姿勢が感じられた。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	勤怠状況は把握している。残業時間はほとんどなく、有給も希望に応じて取得できる環境となっている。また、各自に目標をもって働ける制度が整っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	介護技術の向上をめざしたキャリアパス制度を会社全体で導入している。Eラーニングを利用し、自身のペースで行える研修も実地している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	認知症サポート連絡会などが現在はコロナウイルスの関係で開催されていないため、交流の機会をもてていない		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居希望者には必ず計画作成担当者か介護支援専門員が面談を実地。本人の話を聞くようにし、その要望に応じたケアプランを作成している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人の面談時には家族の同席をお願いしている。本人と家族の意見に相違があれば、すり合わせを行い、双方納得のできるプラン作りを心掛けている		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	基本サービス以外にも本人や家族の希望はなるべく考慮し、可能な限り提案して支援できるようにしている		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員、利用者間は家族関係のような家族性を築けるように家庭的な雰囲気を出すことを大事にしている。利用者が気軽に職員にはなしかけられるような関係性を築いている		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	オンライン面会、もしくは相談室を活用した短時間の面会を行っている。その時に、職員が直接家族からの話も聞き、不安なことなどの相談に応じられるようにしている		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナウイルスの影響で、親族以外の面会が禁止されているため、ほとんど交流できていない	コロナウイルス感染症流行期までは、友人が会いに毎月来られていた方や出身地に2泊3日で息子と一緒に帰られていたもいた。そして、先祖が祭られている寺やすこやか学級に家族が連れていかれていた方もいた。また、仏壇を持ってこられた方は、ご主人の月命日に事業所にお参りに来てもらわれていた。今はコロナウイルス感染者の減少傾向を見て、職員が、利用者の出身地を見に行けるように計画を立て、秋口に行く予定をしている。コロナ禍でも自分の家を見に行きたい方は、半年に1回無人の家に馴染みの物や衣類を取りに行っている。大正琴やウクレレの好きな方は、演奏をしてもらったり、カラオケで流れる自分の作品を繰り返し歌われている方もいるなど、多岐にわたり利用者の馴染みの関係を引き出し、コロナ禍の中でも関係が途切れないように支援をされている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	イベントなどでは職員が隔利用者の周りに配置され、孤独を感じることはないように配慮している。ユニット間での交流も行っており、気軽に利用者同士が交流できるように努めている		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	転院やご逝去等で退去された家族様の相談も行っており、入所者を紹介されることもある		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	できる限り本人の希望に沿った暮らしをしていただけるよう支援している。	入居時に意向や思い、暮らし方の希望を聞くが、入居されてから分かることが多く、把握したことは申し送りやユニット会議で共有しフェイスシートを更新している。利用者の「物忘れがひどくなってきたので、どうしたら良い？」との質問には、日記をカレンダーに記入することのアドバイスをすると記入され、様子を見ながら、職員が声掛けをすることで、続けられている。また、食器洗いが出来る方が2人おられるユニットは、競争されるので昼と夜や1日交替にすることを提案している。草むしりをしたい方やぬか床で漬物を付けたい方にはしてもらえ環境にして、みんなでぬか漬けのお漬物をよばれる等、恩恵を得られている。意思表示の困難な方は今はおられないが、失語症の方には字を書き指差ししてもらっていたこともある。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご本人が忘れている場合など確認が取れない際には、家族様に詳細の確認を行い、把握に努めている		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	往診、訪問看護の結果などを引き継ぎ簿等を活用し申し送り個々人が状態を把握できるようにしている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々の介護状況を、毎月のユニット会議で報告し課題と対応の仕方を話し合っている。本人様、家族様とも相談し、介護計画の作成を行っている	現在の入居者は介護老人保健施設や病院からの入居が多く、契約時にフェイスシートと医療情報で介護計画の基本を作成し、1ヶ月半位様子を見た上で、介護計画に追加か変更をしていることが多い。ユニット会議では毎月のカンファレンスをおこない、利用者の様子を共有している。また、3ヶ月毎の短期目標に対してのモニタリングや6ヶ月毎の長期目標のモニタリングと再アセスメントをおこない、サービス担当者会議を実施して、それぞれの書式に記載されている。介護計画は変化があれば、随時見直し、定期的には6か月毎に見直ししている。サービス担当者会議には計画作成者と介護職員、家族は同席か事前に意見を聞き、訪問診療時の医療情報を加えて検討している。	法人のフェイスシートに基本情報、生活状況、家族構成、医療情報を記入出来る様式だが、入居時の記録は少なく、入居後分かったことでフェイスシートを更新している。など、入居後にたくさんの情報を聞き出されているが、契約時に家族の協力を得て、基本情報、生活歴や生活状況、家族構成、馴染みの関係や暮らし方の意向などを書面で提供してもらわれては如何でしょう。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	サービス提供記録と引き継ぎ簿を活用して把握に努めている。引き継ぎ簿には大まかな事柄を、サービス提供記録には、詳細を記入し情報の共有漏れがないようにしている		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人様や家族様の状況に合わせて、サービスの多機能化に努めている		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	新型コロナウイルスの影響で、地域資源の活用が難しくなっており、支援ができていない		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ご本人様や家族様からの希望がある場合は、必要に応じてかかりつけ医への受診対応を行っている。	入居時に、協力医療機関の訪問診療か、今までのかかりつけ医の継続受診かの希望を聞いている。現在は全員が2週間に1回の訪問診療で受診している。協力医療機関は24時間オンコールで指示を得られるようになっている。訪問看護は月2回の利用で、健康相談をしてもらっている。専門医の受診は家族と行っている。訪問歯科は入居された方の健康チェックをし必要な人の診察をしている。訪問歯科衛生士は口腔ケアを行い、半年に1回アセスメントをしている。起床時と毎食後、介護士が歯磨きの支援をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	提携医療機関が24時間対応している。また、二週間に一回の訪問看護サービスを受けている。気付いたときに、すぐに相談し、適した対応をすることができる		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入居者様の入院時には、定期的に連絡を取り合い情報の共有をしている。家族様を交え、本人様の状態に応じて早期退院ができるように支援をしている		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	提携医療機関と相談し、都度家族様に状態の連絡をしている。必要があれば医師より状態の説明や看取りについての説明と同意を得ている。また、状態が変化した際には、再度、どうするかの話し合いをしている	入居時に「看取り指針」により家族に説明し同意書をもっているが、いつでも変更できることは、伝えている。重度化した時は医師から医療機関で作成した「看取り指針」で家族に説明し、医師、家族、職員の連携により看取り支援をおこなっている。しかし、利用者の状態によっては看取りが近づく、家族が救急搬送を希望されることもある。看取り研修は年1回実施し、手順書を作成している。今年は4月に2名の方の看取りをおこなっている。今までに8名の方を送り、看取り支援後に新規採用職員と経験のない職員に感じたことを書いてもらい、振り返りの会議で共有している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定期的な訓練は行っていないが、適時、急変や事故発生時の対応研修を行っている。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に二回、避難訓練を行っている。また、年に一回の非常災害研修では、避難の仕方や避難場所の確認を行っている	年2回昼・夜想定で避難訓練をおこない、1回は消防署立ち合いのもとで実施している。利用者も参加し、下まで降りられている。別途年1回、非常災害研修をおこなっている。(今年度は机上訓練をする)。運営推進会議では地域の防災について話し合っている。備蓄は、飲料水、アルファ米、カセットコンロ、懐中電灯、電池などを準備し、年2回、棚卸表で見直し期限が迫ると入れ替えている。災害対策マニュアルは作成している。AED設置は本部と協議中であり、BCP(事業継続計画)は本部(会社)で作成中である。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	法人研修や事業所内研修を実施している。研修にて普段の言動を振り返り、適切な対応ができるように指導している	人権、虐待防止(身体拘束適正化)の研修で、接遇やプライバシーを学び、レポート(報告書)を提出して理解を深めている。呼称は「〇〇さん」と苗字で呼ぶことを基本としているが、利用者や家族の希望の呼び方で下の名前やおかあさんなど呼ぶ方もある。居室に入室するときは、ノックをして確認してから入室し、トイレや入浴時は希望に沿った同性介助や小声で声をかける配慮をしている。職員の言動が気になる場合は、職員同士で注意しあうことや、自分で気づくことを大切にしているが、管理者が個別に面談することもある。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	体調面などに問題がない限り、ご本人様の思いや希望に添えるように支援をしている		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ご本人様のペースに合わせて、可能な限り希望に沿って対応している		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	基本的には、好みの服装をしてもらっている。ご自身で選ぶことができない場合には、職員が3種類ほど提案し選んでもらうなどの対応をしている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	新型コロナウイルスの影響で、各階の合同での食事会や外食が難しくなっているが、誕生日などでは、好きなものを食べてもらえるように聞き取り提供できるようにしている	食事は配食業者の管理栄養士が立てた献立で、ご飯と汁物は各ユニットで準備し、朝食は、レシピと食材が届き、職員が調理をしている。昼食・夕食は、メイン(主菜)は温め、副菜の1品は職員が作っている。利用者は下膳と食器洗いを日課として順番にしている。食事会として毎月1~2回、誕生日の人や入居者の希望のものを職員が調理する日を設けている。加えて季節の行事(ひな祭、節分、七夕、土用の丑の日、敬老の日、ハロウィン)などの食事も楽しみにされている。コロナ禍でテイクアウトの種類も増え、お寿司、うどん、弁当、天丼、ハンバーガーなどは利用者に喜ばれている。おやつは、職員手作りの誕生日ケーキ、七夕ゼリー、水無月、水ようかんなどが好評で、4名のミキサー食の方も手作りおやつを楽しみにされている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量や水分量など個人ごとの記録をしている。状態に応じて水分を摂ってもらえるように声掛けや好みの飲み物を提供している		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアを行っている。月に一度、歯科医師より口腔ケアに対する指導があり、実践している		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々人の排せつ記録をもとに、表情などに変化があれば声掛けし、トイレ誘導をして自立に向けた支援をしている	日中はトイレでの排泄を基本とし、排泄記録をもとに入居者の様子を見ながら支援をしている。通気性の良い尿取りパット対応の布パンツを半年ぐらい前から3人の方に使い始め、少しでも快適に過ごせるように経過を見ている。家族からは蒸れを防いで費用も今までより安くなると喜ばれている。布パンツで自立の方も全体で3名おられる。入居時にはリハビリパンツとパットを使用し声掛け誘導をし、排泄用品も職員が交換していた方が、自分で尿意を感じてトイレに行け、布パンツとパッドで過ごせるようになり、失敗時も自分で交換が出来るようになって来られた方もある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排せつ記録を参照し、腹部のマッサージや水分摂取を促している。また、医師の指導の下、下剤などの管理も行っている		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	体調や気分に合わせて、曜日や時間を固定せず、希望に沿った入浴を行っている	入浴は週に2回を基本とし、利用者の希望(「2時に入りたい」「暗くなってから入りたい」)に沿った支援をされている。個浴でお湯の入れ替えは毎回おこない、希望の方には同性介助で支援をおこなっている。懐かしい菖蒲湯や柚子湯でよろこばれ、希望者には入浴剤を入れている。入浴は職員と1対1でゆっくり入りおしゃべりを楽しませている。一人で入りたい方は離れたところから見守りをするなどで、個々の利用者の希望に沿った入浴を楽しむ支援がおこなわれている。入浴拒否の方は時間や日を変えて、翌日に入ることを約束すると次の日には入られている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	早すぎたり、遅すぎたりする場合を除き、起床・入床のタイミングはご本人様の希望を尊重している		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤情報はファイリング、すぐに見ることができる場所に保管している。また、薬が変更した際には、連絡ノートで周知を行っている		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	医学的管理が必要な場合を除いて、嗜好品などは、個々人の好みで購入してもらうようにしている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	新型コロナウイルスの影響で外出ができていない。	コロナウイルス感染症に関する、緊急事態宣言やまん延防止の時期は外出ができなくなったが、ガレージ内を歩くことや、近くの大石神社に散歩に行くことはおこなっている。また、月1回駐車場で移動コンビニの販売があり、利用者は買い物を楽しまれている。ある利用者は大根を1本買い、炊いてほしいと言われる方もあり、利用者と職員と一緒に炊いて、みんなで美味しく頂いた。少し感染が少ない時は、家族と車で出かけ、家を見に行くことが出来て喜ばれている。出身地の小浜の話をする利用者は個別計画にのせて、秋には懐かしい小浜へ是非行ってきたいとドライブに出かける計画を立てられている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご自身で財布を所持されている方もいる。移動ローソンなどの買い物で、支払いをされることもある		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	、個人の携帯電話を所持されている方もいる。使い方がわからない時には、職員が操作方法を伝え使えるように支援をしている		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	テレビの音量や空調の室内温度を調整し、快適に過ごせるようにしている。	リビングは窓からたっぷり日が差し込み、明るくゆっくり過ごせる広さがある。窓の開閉で十分な換気と室温調節にも配慮されている。入居者は3～4台あるテーブルの好きな場所に座っているが、隣に座る人との相性も考えられている。テレビの前の2台のソファや通路に置いたソファでは寝ている人など、リラクセスして過ごされている。また、自分のソファを持ち込みその周りを片づけたり、掃除をしている入居者の姿も見られる。室内や廊下をいろいろ眺めながらずっと歩かれている方もおられ、それぞれが思い思いに過ごされている。室内には季節の花の造花(アレルギーの方が)を飾り、利用者と職員で作った七夕の飾りや短冊が飾られて季節感を採り入れている。壁には京都の行事シリーズの四季の写真が飾られ慣れ親しんできた行事に触れられるようにしている。共有空間の清掃は職員が夜にしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テレビ前や事務所の近くにソファを設置している。各々、好きな時に好きな場所に座ることができるように工夫している		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	基本、持ち込み自由。思い入れのある家具や仏壇を持ち込まれている方もいる。	居室は空調機器、カーテン、ベッド、クローゼットが設置され、6畳の広さの室内には、筆筒やソファ、テーブル、椅子、仏壇、三面鏡、額に入れた写真などそれぞれに馴染みの物を持って来ている。家族と利用者で今迄の生活が継続できるように設えてもらっている。また、利用者の生活動線を考えて、安全面に配慮して(家族の許可を得て、変更する時もある。清掃は箒とちりとりでこまめに掃除をする入居者や、職員がリネン交換時に掃除をする時に一緒にする方もある。表札は写真で飾られ、入居者の好きなものや行きたい所、懐かしの出身地、ご本人の顔などのオンリーワンの表札にして、安心して過ごせるようにしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	各居室には、名前のテープを貼り、ご本人様の写真や絵などを飾り、ご自身の部屋だと認識しやすくしている		